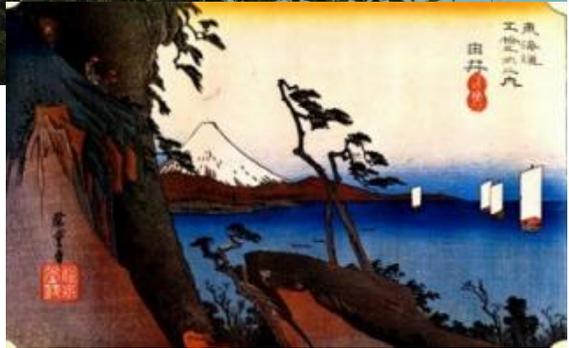


伊勢東海車楽旅



平成おかげ参りを4日でドライブ

葛飾区民記者・かつしかPPクラブ

隅田 昭

【まえがき】おかげ参りについて



最近では江戸文化を見直そうと、旧宿場町で文化財を保護し、観光の目玉にしている場所もある。しかし、それらが連携されたガイドブックはおろか、ホームページすら存在していない。

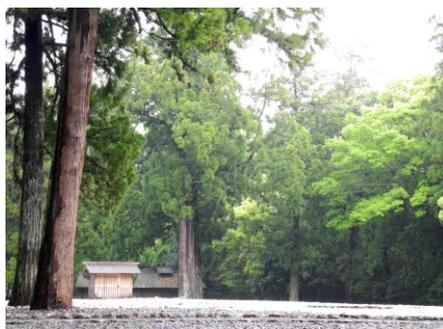
そこで記者は3泊4日で、東京⇄名古屋(2泊)⇄伊勢(1泊)を走破できる、気軽なドライブ旅を提案する。

おかげ参りは江戸時代に60年周期で起きたと伝わる、伊勢神宮への集団参拝だ。奉公人が主人に、子供が親に、無断で参拝に出かけるのが許され、大金を持っていなくても、沿道で施しを受けられた。

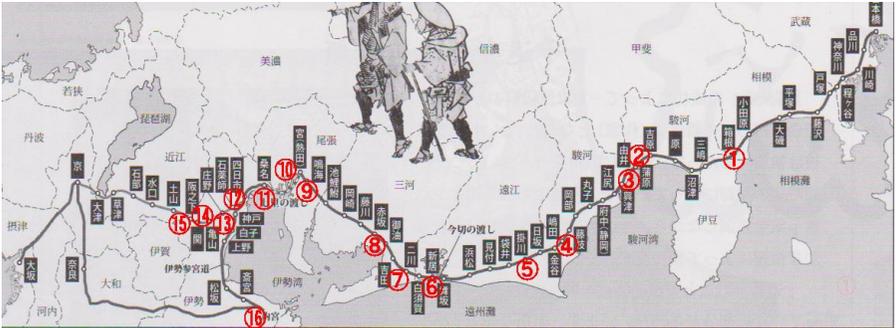
江戸からは片道で15日、往復で1か月ほどかけて伊勢参りを行った。もっとも、途中で寄り道をしたり、足を伸ばして大坂にでたり、帰りに中山道を通して善光寺詣でをしたりと、金と時間と体力を考え、かなり自由に行動している。当時の庶民はパワフルだった。

この時代、農民や商人は移動する場合に厳しい制約があった。石高や生産性が低下し、諸藩の存続に影響する恐れがあったからだ。しかし、「豊作をお祈りしたい」、「店を繁盛させたい」と言われれば、親や主人は仕方なく見送った。

最後のおかげ参りは「ええじゃないか」が流行した、慶応3年(西暦1867年)と言われているが、厳密な基準は存在しない。式年遷宮が行われた2013年以降、現在に至るまで「平成おかげ参り」の状態が続いているのではなかろうか。



もくじ



- ①箱根 ②蒲原 ③さった峠 ④島田 ⑤掛川 ⑥新居 ⑦二川 ⑧赤坂
⑨鳴海 ⑩熱田 ⑪桑名 ⑫石薬師 ⑬庄野 ⑭関 ⑮鈴鹿峠 ⑯伊勢

①箱根



箱根関所の確立は徳川二代秀忠の時代、元和四年（1618年）から五年あたりと言われている。「関所」は江戸を守るため、幕府が旅人の監視や管理をする場所だ。

「入り鉄砲に出女」と言われるが、箱根関所では「江戸から出る女」のみ、厳格な監視をしていた。

幕府では謀反予防策として諸国大名の妻子を、「人質」として江戸に住ませた。これらの女性が無断で国元まで帰らぬよう、徹底して取り締まったのだ。元禄十五年（1702年）、江戸で奉公していた娘「お玉」は関所破りで死罪となり、今も語り草になっている。

②蒲原（かばはら）

この宿場周辺を散策し、大型スーパーやドライブインで休憩するのもよい。10分ほど歩けば富士山と新幹線が一望できる、穴場スポットが見つかるだろう。

通行人の男性に尋ねたところ、「しらすと桜エビがうまいけど、名所や街道の名残りはないなあ。夏場なら日没前後で、海のいさり火がきれいだけど」と聞かされた。



③さった峠（由比～興津間）



表紙に掲載したのが、このさった峠だ。唯一みかん農家を経営する方がテレビで注目されたので、当日は若いカップルやハイカー、外国人の撮影クルーも来ていた。

きれいな公衆トイレがあり、つつじが咲く遊歩道も完備されている。駐車場も8台止められるが、峠までのびる坂は急で、マイクロバスやワゴン車などはきびしい。

二股の道に迷っていたところ、工事現場の方から「頂上は湧き水と雨で滑るからローギアにしな」と、親切に案内していただいた。

④島田（大井川の渡し）



「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」とうたわれる島田宿は、現在のJR島田駅ちかくにあったそうだ。

大井川のほとりには博物館や資料館が古い町並みで軒を並べているが、観光案内の女性から、「川越しの人足が交替で定宿にしていた場所だった」と聞く。

はじめは兩岸の島田と金谷に、各 350 人までと定められていたが、流通が発達した幕末には 650 人まで増えた。人足は当時の人気力士にあやかり、腰に「二重廻し」と称する前垂れをしめて働いていたが、四寸五尺（約 165 cm）まで増水すると「川止め」となり、旅人は足止めをくらった。幕府が橋を架けなかったのは、江戸防衛の一環と考えられる。天保十一年（1838 年）に仮橋も架けられたが、庶民の通行は許されず、徳川家の大名行列などに限定された。

川幅や水深でも通行料金が定められていた。寛政 4 年（1792 年）の記録によると、人足の肩に旅人がまたがる、最も安全な「股通」、「川幅四十間」の場合で「四八文」だった。

一文を 30 円で換算すると約 1,440 円になる。いちばん高い

「脇通」で九十四文、2,820 円ほどだ。ただし人を乗せて着物も濡れない、輦台（れんだい）は料金が違う。庶民の場合は 1 万円前後だったが、大名クラスの場合、10～15 万円ほどかかった。



⑤掛川

掛川宿は駿河湾沿岸の相良（さがら）から秋葉山を経由して、信濃国に通じる塩の道が交差する大きな宿場だった。

愛妻家の名君として誉れ高い、山内一豊（やまうち かつとよ）の居城らしく、荘厳な構えと街道整備が清々しい。当時の所蔵品も多く、城マニアならずともじゅうぶん満足できる内容だ。

また、二宮尊徳を師事する「大日本報徳社」も近くにあるので、仕事や学業で成功したい方にもおすすめしたい。



⑥新居（今切関所）



新居の関所は開設当時、今切（いまぎり）関所と呼ばれていた。展示品や史料は街道筋で群を抜いている。

徳川家康のおひざ元で、慶長5年（1600年）に設置された。当初は津波などの災害も多く、7年で2度も移転をくり返した。

遠州灘で舞坂を結ぶ「今切の渡し」もあり、通行の難所でもあった。新居関所は「鉄砲改め」と称する役人が通行手形を吟味し、武器の江戸流入をきびしく調査していた。

⑦二川（ふたがわ）



二川宿は33番目の宿場で、現在の愛知県豊橋市にあたる。徳川時代は征夷大將軍の天領で、裁判所などの幕府直轄機能も置かれていた。

そのため、大名や公家など貴人の定宿も多く、それらは現在も旧東海道沿いで、2か所しか現存されていない。

本陣跡は資料館として利用されており、旅籠の「清明屋」と、商家「駒屋」の見学ができる。

取材日はこどもの日のイベントが開催され、10歳ほどの女の子が「ふるい町並みが好き」と微笑み、職員と気さくに交流していた。

⑧赤坂

「御油（ごゆ）や赤坂、吉田がなけりゃ、なんのよしみで江戸通い」という言葉がかつてあった。

この周囲は多くの遊女を抱え、街道沿いは江戸を目指す商人であふれ返っていたらしい。

展示品や観光案内は少ないが、古びた寺社がいくつも残されており、散策にはもってこいだ。



⑨鳴海

ちょうど40番目の宿場が鳴海だ。この場所は尾張藩の保護のもと、江戸初期から「有松絞り」という着物の絞り染めが有名だ。

重厚なたたずまいを持つ問屋が軒を連ね、ハンカチや手ぬぐいなどを手染めする体験教室などもさかんに行われている。



クルマで10分ほどの場所に、織田信長が今川義元を少ない手勢で破った、桶狭間古戦場もある。

⑩熱田（宮宿）

熱田は宮宿とも呼ばれ、言わずと知れた熱田神宮のおひざ元であり、東海道で随一の宿場だった。

天保4年（1843年）には、本陣が2軒、脇本陣が1軒、旅籠屋は248軒を擁し、人口は1万人をゆうに超えていたという。港町でもあり、町奉行の管轄地だった。



次の桑名宿とは東海道で唯一の海路となる、「七里の渡し」で結ばれ、江戸中期には四日市宿との航路も新たに開設された。

残念ながら港の周辺に、わずかな建物を残すのみだ。名古屋なら突然の宿泊でも予約がとれる。この場所を起点に伊勢と往復しよう。

⑪桑名



「その手は桑名の焼きはまぐり」という、しゃれが示すとおり、ここ桑名は海路の要所だった。

徳川四天王である本多家のほか、松平家の多くの大名が藩主を務めた、由緒ある城下町だ。

九華公園内の「鎮国守国（ちんこくしゅこく）神社」が名所だ。

焼きはまぐりや煮はまぐりは滋養強壮に優れると言われ、即席で旅人に供されたり、しぐれ煮として土産物で売られたりした。

なお、この日は「金魚まつり」が開催されていた。職員から「この地をおさめた松平公が金魚好きだからね。近くの弥富（やとみ）で、養殖を奨励していた縁で催されている」と聞く。祭りで買った金魚菓子はやさしい味で、疲れたからだをいやしてくれた。

⑫石薬師（いしやくし）

四日市と亀山に挟まれた石薬師は44番目の宿場だ。

日本武尊が昇天した後、この地で白鳥になって天に飛び立ったという伝説があり、かつては「高飛村」と呼ばれていた。

近くには歌人、万葉学者で高名な佐佐木信綱記念館もある。



⑬庄野



庄野宿は三重県鈴鹿市にあり、寛永元年（1624年）に「草分け36戸、宿立て70戸」で設置された。

この宿はこじんまりとしており、公営駐車場も狭いが、資料館は農機具や民具が飾られている。街道筋はひっそりとしており、素朴な農民の暮らしが味わえる。

⑭ 関

旧東海道は宿場の原型をとどめていない場所も多いが、この関宿は奇跡的にも多くの建物が、当時の状態で残されている。

「重要伝統的建造物保存地区」にも選定されており、若いカップルや、外国人観光客からも人気を得ている。

東西1.8km、25ヘクタールという広大な地域に、約200軒もの古い町屋がひしめき合うように並ぶ。ちなみに「関の山」とは、この宿場から八坂神社に向かう山車が豪華すぎて、それ以上飾れないというのが語源だ。

町並みには「地藏院」をはじめとした神社仏閣が多く、旅籠「鶴屋」と置屋の「開雲楼と松鶴楼」のほか、本陣や高札場跡なども見学できる。



⑮ 鈴鹿峠（坂下～土山間）



時間と体力に余裕があれば、三重と滋賀県の境界線にあり、旧東海道屈指の険路といえる鈴鹿峠を奨めたい。

この地は古くより、畿内から東国へ出るための重要な役割を担っていた。

ふもとは片山神社があり、江戸時代そのままの古びた光景が見られる。

中腹は山賊が根城にして旅人を襲っていたと伝わる、天然記念物の「鏡岩」がある。岩に登って国道1号線を眺めると、改めて難所と実感できる。

⑩伊勢神宮

ゴールの「お伊勢さま」は言うまでもなく、神社本庁の本宗（ほんそう）である。太陽を神格化した「天照大御神」を祀る、皇大神宮の「内宮（ないくう）」と、衣食住の守り神である、豊受大神宮の「外宮（げくう）」に分かれており、クルマで20分程度だ。

式年遷宮の行事は20年ごとに行われている。内宮、外宮とともに正殿の造替をはじめとして、65棟にも及ぶ殿舎や、宇治橋などの建造物も作り替えられるのだ。

日頃の邪念を捨て、名古屋の安宿を拠点に3泊4日で移動できた、快適な社会に感謝しよう。



峠の藤が心の森に咲く



- ◆ 写真・文章・編集： 隅田 昭
- ◆ 撮影：平成30年5月1～4日
- ◆ 発行日：平成30年5月20日

本冊子の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。